

第一章

時代概説

(打ち寄せる時代の潮)

第一節 沖永良部の自然環境

沖永良部の自然環境については本誌民俗編に詳しく記されているが、少しく見方を変えて、再度取り上げて考えてみたい。

九州本土から南西方に飛石状に延びる種子・屋久・トカラ、奄美・沖縄、宮古・八重山の南西諸島弧の大体中間部に位置するのが沖永良部島であり、行政中心地鹿児島市へ約五三〇キロメートル、名瀬市と那覇市へは約一七〇〜一八〇キロの地点にある。気候は多湿・亜熱帯性で照葉樹林の生育に好適であるが、夏から初秋の台風常襲地帯として知られている。

(注) 照葉樹林帯の文化 ヒマラヤ山脈南麓―アッサム―雲南―揚子江南側山地―台湾―日本南西部の常緑広葉樹林帯。くす・かし・しい・茶・桑・芋類・粟・稗・稲・わらび・くず・砂糖きび・バナナなどの植物が生育する。これから焼畑農業・水田作、醸

造発酵法、養蚕が生まれ、各種食料衣料が開発される。(鹿大南方文化研究所中尾佐助氏)

島の地形は細長いヒサゴに似て、大島・徳之島・沖縄島に比較すれば低平で、最高の大山で二四五メートル、次いで越山一八六メートルである。毒蛇ハブの生息もない。河川に見るべきもの無く、水田地域が少なく、石灰岩層の地下水を堅穴・横穴から得た湧清水を中心に集落を形成し、周辺の平地は広く耕され畑作農業を主とする。海岸は一部に砂浜を成し、大部分は隆起珊瑚礁の断崖を造り、出入り少なく防風防波の港湾に恵まれず、小舟利用の沿岸漁業は小規模にとどまり、珊瑚礁上に漁する自給程度である。

面積は九四・五平方キロ、可耕性高いとしても人口収容に限界あり、地域的小集団の協力体制にとどまり、政治的に権力を張る組織には至り難い風土である。

以上の諸点から抽出すれば

(一) 人多く物豊かなる地方に文化優先するの原則からみて、強大なる支配権者は出現しえなかつたし、沖縄または鹿児島からの圧力に対抗する力も持ちえなかつた。―沖縄は南方視界の中に在り、その政治的文化的影響は生

活万般に波及している。

(二) 鹿児島本土からの距離遠く、面積が割に小さく、今日のいわゆる四、五級僻地視されたせい、砂糖の栽培導入が遅れ、その上納貢法の施行が藩政末期であり、上三島の苦しんだ砂糖地獄が比較的短期間であつたことは、逆に幸運とも言える。

この項に「打ち寄せる時代の潮」と題したが、時代により、南風吹き来れば胸襟きょうきんを開いてこれを迎え入れ、北風逆巻けば身を伏してこれを避ける歴史の経過は、この位置、自然環境に課せられた悲しき宿命とも言える。

どの時期に、いかな理由で、いかにして吹き来りし潮流かを、国史・薩摩史・琉球史その他に照らして沖永良部の変遷を見、その意義を理解したいと思うのである。